

第17回新潟総合病院精神医学研究会

日時 平成27年2月21日(土)
午後3時より
会場 ホテル日航新潟 4F 朱鷺

I. 一般演題

1 統合失調症患者の認知機能に関連する臨床的特性

國塚 拓郎・鈴木雄太郎・安部 弘子
染矢 俊幸

新潟大学医歯学総合病院 精神科

【目的】統合失調症で認知機能が広汎に障害されることは以前から知られ、認知機能障害と社会生活との関係について近年注目が集まっている。先行研究では統合失調症のいくつかの臨床的特性が患者の認知機能と関連することが示されている。本研究は当施設入院中の統合失調症患者の臨床的特性と認知機能との関連を分析した。

【方法】2010年10月から2013年12月の間、当施設入院し症状改善した段階で統合失調症認知機能簡易評価尺度日本語版(以下BACS-J)を施行した統合失調症患者80名(男性34名,女性46名)のカルテを調査した。臨床的特性として年齢,発病年齢,罹患期間,教育年数,抗精神病薬服用量(クロルプロマジン換算),簡易精神症状評価尺度(以下BPRS)がBACS-Jのcomposite score及び各下位検査得点に与える影響を重回帰分析で検討した。

【結果】対象の年齢は平均 34 ± 13 歳,発病年齢は平均 22.7 ± 9.3 歳,罹患期間は平均 11.3 ± 9 年,教育年数は平均 12.8 ± 2.4 年,抗精神病薬服用量は平均 684 ± 278 mg/day, BPRS得点は平均 26.1 ± 7.3 。BACS-Jはcomposite scoreが平均 -2.12 ± 1.64 ,言語性記憶課題は平均 36.7 ± 12.7 ,数字順列課題は平均 17.8 ± 5.5 ,トークン運動課題は平均 65.6 ± 17.2 ,言語流暢性は平均 37.8 ± 11.9 ,符号課題は平均 51.5 ± 12.1 ,ロンドン塔課

題は平均 15.8 ± 4.2 であった。Composite scoreを予測する因子としてBPRS得点が検出された($\beta = -0.25, p < 0.05$)。BACS-J各下位検査については,言語性記憶課題は罹患期間($\beta = -0.27, p < 0.05$),トークン運動課題はBPRS得点($\beta = -0.23, p < 0.05$),数字順列課題は教育年数($\beta = 0.23, p < 0.05$),符号課題は教育年数($\beta = 0.30, p < 0.01$)及び年齢($\beta = -0.28, p < 0.05$),ロンドン塔課題は教育年数($\beta = 0.33, p < 0.01$)及び年齢($\beta = -0.24, p < 0.05$)が予測因子として検出された。言語流暢性に影響を及ぼす臨床的特性はなかった。

【結語】本研究の結果から統合失調症の認知機能は精神病症状及び罹患期間に影響されていることが示され,実臨床ではこうした特性を考慮しつつ認知機能評価を行うべきと考えられた。

2 心理教育後の統合失調症患者における体重変化に関する検討

森川 亮・鈴木雄太郎・安部 弘子
國塚 拓郎・染矢 俊幸

新潟大学医歯学総合病院 精神科

【目的】第2世代抗精神病薬の副作用である体重増加は糖尿病及び動脈硬化性心血管疾患発症の危険因子であり予防法が模索されている。当施設では体重増加の問題のある統合失調症患者に入院中独自の心理教育を行い,体重増加予防に取り組んでいる(安部ら,2013)。先行研究の中には心理教育が過度な体重増加を抑制したとの報告はあるが教育の長期的効果を検証した報告は殆どない。そこで我々は心理教育後の患者の体重変化を調査した。

【方法】対象は2006年7月から2014年8月までに当科へ入院し心理教育後,退院した統合失調症患者で現在も当院通院中であり,体重測定を施行できた平均年齢 38.5 ± 2.14 歳の男性10名,女性11名。入退院時と外来時のbody mass index (BMI),血液生化学検査値を調査し解析した。本研究は新潟大学医学部倫理委員会で承認を受け患者全例か